

浜松市北区引佐町久留女木地区における地域づくりの方策の研究

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸ゼミ

指導教員：教授 船戸修一

参加学生：金田鈴音・鈴木義人・八木彩樺（4年生）

小淵康成・高橋明日香（3年生）

植田勝也・富田菜々美・森田瑞希（2年生）

下位凌（1年生）

※ 1・2年生はオープン参加である

1 要約

現在、中山間地域の多くは人口減少や少子化・高齢化による担い手不足に悩まされている。そこで重要な視点が、人口を「世帯」ではなく「家族」で捉え、集落から転出した子どもである「他出子」の存在から考えることである。彼らは現地に居住していなくても実家や集落と継続的につながりを持ち、集落を支える担い手になる可能性がある。今年度は、その具体的実証として浜松市北区引佐町の久留女木地区を取り上げ、他出子の実態を明らかにした。ただ、新型コロナ感染への不安があったため、当初の予定を縮小して調査を行い、他出子と集落との関わりを明らかにした。

2 研究の目的

浜松の中山間地域、とりわけ北区引佐町の「久留女木地区」では人口減少や高齢化によって地域社会の担い手が不足している。ここには、国による「つなぐ棚田遺産」（2022年2月）や県による「静岡県景観賞」（2011年11月）に指定された棚田がある。2017年度のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」のロケ地にもなり、今も観光客が絶えない。久留女木地区は、このように観光客誘致につながる地域資源を有した地域である。しかし、この棚田も耕作者の減少に伴い、耕作放棄地が増加している。また現地の人口は年々減少し、高齢化も進んでいる。よって久留女木地区の「他出子」（集落から転出した子ども）は、今後の棚田の米作りだけでなく、地域を支える担い手になり得る。このような他出子に限らず、その子ども——集落に居住する地域住民（親）から見ると「孫」——も、他出子の帰省にあわせて現地に通う地域もある。昨今、このように地域とのかかわりを持つようとする人たちを「関係人口」と称し、その人口増加が期待されている。他出子やその孫は「関係人口」として含まれるため、その実態を明らかにすることは、今後の集落づくりに資すると思われる。

3 研究の内容

今年度は、2016年度から船戸ゼミ生を中心にして取り組んできた久留女木地区の棚田に

おける米作りや地域の活動支援を通して地域住民との関係を構築しつつ、地域住民への調査を実施した。

4 研究の成果

今年度も、昨年度に引き続き北区引佐町久留女木地区の集落について調査した。昨今「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、独居老人世帯が増加し、このため集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」(大野

2005:22)を「限界集落」と呼び、現実と大きくかけ離れた(山下2012:27)形で、その消滅危険性だけを煽る議論が盛んである。しかし「他出子」が集落の近くに居住し、彼ら彼女たちが頻繁に実家に通えば、

そう簡単に集落は消滅することはない。このような集落を越えた家族関係についてのデータは、行政(浜松市)でさえ、全く把握していない。また週末など定期的に出身集落の空き家に戻ってくる元住民もいる。このような人たちは他出子同様住民票には存在しないが集落住民と安否確認・買い物・農作業支援などで関わっているならば集落を支える「潜在的な住民」である。

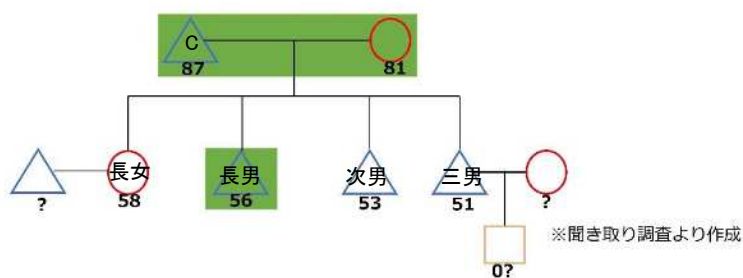
聞き取り調査は、棚田の地権者であり、そこで耕作に取り組む男性2名(Cさん、Dさん)を取り上げ、他出子と集落について調査した。

以下、Cさん、Dさんそれぞれの聞き取り調査の結果について説明する。

Cさんには、子どもが4人おり、長男は実家に両親と同居しているが、それ以外の兄弟は実家を離れ生活している(図1)。C家の長女(50代)は静岡県湖西市、次男(50代)は静岡県掛川市、三男(50代)は浜松市北区にそれぞれ居住している。いずれの兄弟も不定期ではあるが実家に帰省しており、休日が合えば配偶者などの家族も連れてきている。

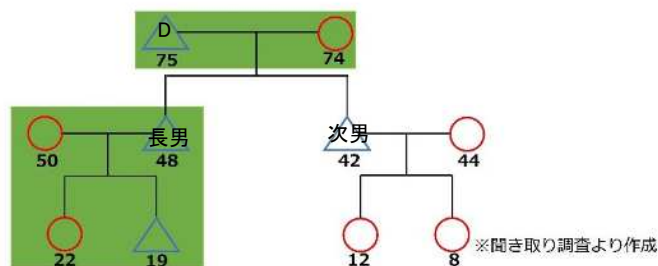
【図1】

C家の家族構成



【図2】

D家の家族構成



Dさんには、子どもが2人おり、一人は同居しているため、他出子（次男）は1人である（図2）。D家の次男（40代）は、浜松市中区に居住し、多いときには週1回は実家に帰省しており、その家族も一緒に帰省することが多いという。

さらにC家・D家いずれの他出子も、田植えの前後や稲刈りなどの人手が必要な時期にあらかじめ声をかければ、棚田での農作業を手伝ってくれる。D家の場合は、同居している長男家族よりも手伝う頻度は高いという。このような支援が期待できるため、棚田での米作りを継続することはできている。しかし、それぞれの家の仕事の関係もあり、両家とも当日の朝に連絡すればすぐ来てくれる他出子がいる一方、来ることが難しい他出子もいるため参加頻度にばらつきがある。また、D家では親が棚田での耕作を継続することが困難になった場合は、もう帰省することはないという意向を伝えている他出子も存在する。そして何よりも、いずれの他出子も、久留女木地区の住民とは関わっていない。よって現状では棚田という有力な地域資源の存在が、他出子が実家へ帰省する動機となっている。そのため、棚田で耕作し続けることが、地域を持続させる点で有効であると考えられる。

5 地域への提言

今回の調査によって、久留女木地区の他出子が棚田での米作りの支援を通じて地域との結びつきを持っていることが明らかになった。棚田という地域資源が他出子を地域に呼ぶ動機となっているため、地域の存続を考えるうえで、この地域資源である棚田の維持・保全が重要な課題となると思われる。

地域資源を生かした地域づくりの例として、島根県邑南町が挙げられる。ここでは2018年に廃線となったJR 三江線の廃線跡を地域資源として生かし、その整備を「関係人口」となる地域外の人びとが担っている。この事例では、地域住民と地域外の人びととの一致点を探ることが課題となっている。その点、久留女木地区の場合は、棚田という地域資源の整備を、地域で育った経験を持つ「他出子」が担うことにより、従来からの家族関係を基盤とした地域住民との関係性を構築することが可能となり、「関係人口」を生かした地域づくりの取り組みを行うことが可能となることが期待される。

以上のように地域資源を生かし、その整備を「他出子」をはじめとした「関係人口」が担うことが、地域づくりを進める上で重要になることが考えられる。

参考文献

- ・大野晃(2005)『山村環境社会学序説-現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会.
- ・徳野貞雄, 柏尾珠紀(2014)『T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力-限界集落論を超えて』農山漁村文化協会.
- ・山下祐介(2012)『限界集落の真実-過疎の村は消えるか?』筑摩書房.
- ・朝日新聞(2022)3月3日付朝刊『(求む「関係人口」:上) 定住未満、観光以上のパワー』21頁.

6 地域からの評価

昨年度に引き続き、久留女木地域を対象に調査することで、これまで船戸ゼミが地域の棚田でのフィールドワークで築いてきた信頼関係を活かした調査を実施することができた。今回の調査で地域資源である棚田が「関係人口」づくりに寄与していることが判明したことから、今後も「関係人口」に寄与する地域資源を活用した持続的な地域づくりにつながることを期待したい。【浜松市 市民協働・地域政策課 鈴木芙実】

研究活動の様子がわかる写真



久留女木地区の棚田での田植え(6月12日)



久留女木地区の棚田での聞き取り調査(11月9日)



久留女木地区の棚田での稲刈り(10月29日)



久留女木地区の棚田「収穫祭」準備
(12月10日)



久留女木地区の棚田「収穫祭」での活動報告(12月11日)